午後一時ケンタン東方八十キロのシャン州第二の都市チョンを占領した。チョン市は附近に米の産額豊富にして、軍事上の要衝である。

ビルマより敗退の英軍が遺棄したイタヤーの山

例を公告し六月八日より二週間に亘り二對一の割合にて舊法幣の全面的交換を實施し蘇浙皖地區及び南京、上海兩市に於ける舊法幣の法的通貨性を剝奪して中央儲備銀行券による通貨統一を實施することゝなった。●本田、鈴木、江東、秀、山本、後藤のわが陸鷲戰線連合部隊は敵の衝き雲南驛、南飛行場（昆明西方約二百キロ）を奇襲敵機十機を撃破、更に彈藥庫一棟、兵舎二棟を爆破炎上めしめ全機無事歸還した。●

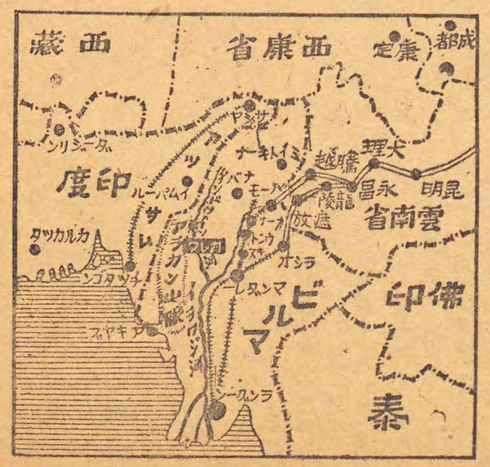
五月三十一日

●關門國道隧道貫通祝賀式を湯澤内相臨席の下に下關市舊壇ノ浦町の式場にて擧行。●國民政府は財政部布告並に各種條

余漢謀の指揮する重慶軍第七戰區に鐵槌を加へるべく我が南支軍は本日未明ひそかに行動を起し右翼は長隆尾（從化南方十五キロ）を午前二時十分占領、左翼は流溪水を敵前渡河に成功、主力の諸部隊は忽ち從化前衛の大岡嶺（標高一八四メトル）を占領した。

六月一日

●高松御差遣宮殿下には五日間に亘らせられた新京にての御日程を終へさせられ午前九時新京御發、午後一時十分奉天に御着遊ばされた。●國民政府訪日特派大使褚民誼外交部長以下副使、隨員一行六名は入京第四日目の本日宮中に參内、天皇陛下に謁見仰付けられた。●大東亞戰爭開始以來半歲に亘り閉鎖中の比島小學校再開。●ジャバ軍政部では布告第十七號を以てジャバ私有地の國有編入を宣言した。●内地航空司令部の創設に伴ひ、その軍司令官に安田武雄陸軍中將が親補された。●メキシコ政府は樞軸國に對し正式に宣戰を布告、これにて對樞軸宣戰を行つた米洲大陸の共和國は十一ケ國となつた、即ち米國、キューバ、コスタリカ、グアテマラ、サルヴァドル、パナマ、ニカラグア、ホンヂュラス、ドミニカ、ハイチ、メキシコである。●三方面より從化に肉薄猛攻中のわが南支軍は本日未明從化縣城を占領した。從化は廣東省中部の要衝、從化縣城の所在地で古い街ではあるが、商業の中心は附近の街口鎮に移り、今は形骸を止むるに過ぎず、近くに温泉があるが、交通不便、蔣軍は十四年四月から十月にかけて『八月攻勢』を呼號してこの地を本據として第四路軍約十ケ師を動かしたが、皇軍の一擊に潰え、從化は同年九月四日陷落した、その後同年十二月から十五年一月にかけての翁英作戰の際にも戰火の一中心となつた。●楊子江海軍部隊は强力な陸戰隊をもつて大洲島に上陸、同島附近の殘敵を完全に掃蕩。●わが砲兵隊は昨日より本日にかけて黄河對岸瀘關、關鄉に猛砲擊を開始した。



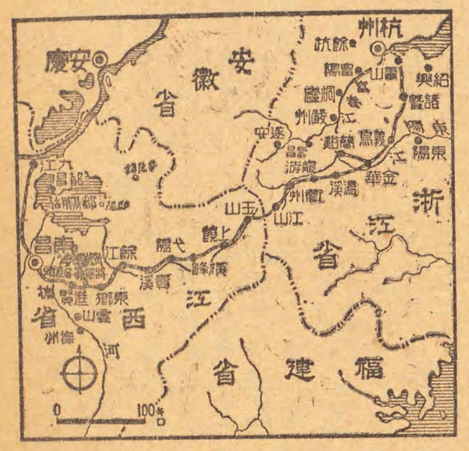
六月二日

●支那方面海軍部隊は南方の要衝川石島を五月廿日未明占領、五月下旬海門、臺

州、温州方面に向つて行動を開始、三十日未明玉環島の上陸作戰に成功午後四時玉環縣城を占領、引續き廿一日全島の殘敵掃蕩を完了、われに何等の損害なしと支那方面艦隊報道部發表。●ビルマ雲南方面のわが陸鷲は雲南驛南飛行場を急襲、敵戰闘機九機を撃破。●鄱陽湖南方作戰に呼應して九江西方に待機中のわが精鋭部隊は星子對岸に奇襲上陸を敢行し要衝都昌縣城を占領。●泰軍はケンタン、ヨンの兩市につゞく南部シャン州の要衝でケンタン州廳所在地ミュウ市を占領した。

六月三日

●滿洲國建國十周年御慶祝のため滿洲國へ御差遣の高松宮殿下には、晴れの御使命を滯りなく終へさせられ本日御歸國遊ばされた。●金華、蘭谿を攻略した諸部隊は本日拂曉定山谿敵前渡河に成功、衢州攻略の火蓋を切つた。●一日午後三時撫河の渡河を完了した諸部隊は敵第七十五師及び第百軍主力を追撃し本日進賢に突入した。●南支軍の諸部隊は早朝五指山を占領、又午前十時には粵漢線の要衝源潭墟に突入した。●西江方面の諸部隊は敵の抵抗を排除し、新街北方廿キロの犂壁嶺を占領。●比島派遣軍は



午前十時よりマニラ市ルネタ廣場に於てバタアン、コレヒドール攻略記念觀兵式を擧行。●航空部隊は廣東省西方の要點四會を爆撃多大の戰果を收めた。●江西前線にては撫河兩岸を二手に分れて進撃中の右岸部隊は二日夕刻李家渡附近を渡河し、直ちに左岸の要衝羅嶺（南昌東南五十キロ）を占領し、本日正午撫州西方二十キロの雲山市を占領した。●水上機動部隊は廣東省の北江沿岸の殲敵を粉碎つし〳〵廻江を開始し本日午後源潭墟西方十キロの州心墟の敵を粉碎。●バタアン半島、コレヒドール要塞の陷落を記念しマニラに於て觀兵式擧行。●米下院はルーマニア、ハンガリー、ブルガリアに對する宣戰布告案を可決した。

六月四日

●從化を攻略した南支軍精鋭諸部隊は三日午前四時敵第百五十三師の前衛基地大頂を突破し、右翼は大潟塔を占領し前面の四三〇高地に據り頑强に抵抗する敵に猛攻を加へ本日午前八時これを完全に占領。●二日鄱陽湖畔の要衝都昌を攻略したわが精鋭部隊は更に江上艦隊の掩護下に舟艇機動をもつて今朝都昌東方廿四キロの要衝紅磯街を占領した。●昨日源潭墟に突入これを占領した部隊は大嶺頭伯公坳、羊仔山附近の要衝を確保し、北方及び東方に對し敗敵を追撃し、北江の舟運を遮斷し清遠縣城を制壓。●わが地上部隊の進撃に協力し連日花々しい活躍をつづけつつある南支陸鷲の精鋭は午前長驅廣西省の敵後方軍事據點桂林を急襲、前線應援のため蠢動を開始した敵軍に對し巨彈を浴びせて敵の心膽を寒からしめたほかさらに飛行場その他軍事施設を爆碎して全機無事歸還した。また他の一隊は敵第六十四軍司令部所在地たる肇慶（廣東西方七十キロ）を襲ひ兵舍その他軍事施設を爆撃し敵軍長陳公俠の本據を木ッ葉微塵に粉碎した。

六月五日

●帝國海軍部隊は特殊潜航艇をもつて五月廿一日未明、マダガスカル北端のデエゴ・スワレズを奇襲し、英國戰艦クキーン・エリザベス型一隻ならびに英國乙級アレーサス型一隻を撃破せり（大本營發表本日午後五時）●帝國海軍部隊は特殊潜航艇をもつて五月廿一日夜濠洲東岸シドニー港を强襲し港内突入に成功、敵軍艦一隻を撃沈せり、本攻撃に參加せるわが特殊潜航艇中三隻未だ歸還せず（大本營發表本日午後五時十分）クキーン・エリザベス型は三萬六百噸、速力廿五海里乘組員千百八十四人。アレスーサ型は五千二百廿噸、速力廿二海里乘組員四百五十名である。

六月六日

帝國海軍部隊は五月下旬並に六月上旬東京灣、潮岬南方海面及び九州西南方海面に出没中の敵潜水艦四隻を撃沈せり（大本營本日午後三時四十分發表）われに攻撃された、この四隻はいづれもわが防衛部隊に屬する海鷲の爆撃を受け、或ひは同じ任務の艦艇の爆雷を受け物凄き渦卷とともに破壞された夥しい機材を海上に吹きあげたもののみであり、毫も推定戰果ではない、不確實のものを加へればその數字が增加するであらうことは疑へぬ。●浙贛方面に作戰中の中支軍は六日午後六時衢江省最後の據點衢州の完全攻略を次の如く發表した（一）軍は衢州防衛陣地に據りて頑强に抵抗せる敵約四個軍に對し六月三日黎明より一齊に總攻撃を開始し敵約十五個師に殲滅的打撃を與へ六月六日午後六時衢州城を完全に攻略せり（二）陸軍航空部隊は連日の悪天候を冒し地上部隊の攻撃に密接に協力し潰走する敵部隊を攻撃して偉大なる戰果を發揚せり（三）將兵の士氣極めて旺盛なり。●江西戰線で進撃東南方廿五キロの東鄉城外に殺到した皇軍は城門を奪取後市内に突入、東鄉を完全に占領した。●西樵

太平洋反樞軸聯合軍司令部は聯合國船一隻がまたも濠洲ニュー・サウスウエルス沖で日本潜水艦の攻撃を受け沈沒した旨發表と外電報ず。●南方各地に擴大しつゝある印度人運動に單一統一的な性格を與へる爲めの印度人聯合大會第一日が泰國バンコック市で開催された、會議は六月二十三日まで續行される。●泰軍はシヤン州の重要都市ムオンユウを完全占領。

六月七日

●帝國海軍部隊は六月四日アリューシヤン列島の敵據點ダッチハーバー並に同列島一帶を急襲し四、五兩日に亘り反復之を攻撃、一方同五日洋心の敵根據地ミドウエーに對し强襲を敢行し、重要軍事施設に甚大な損害を與へ、更に七日以後陸軍部隊と緊密な協同のもとにアリューシヤン列島の諸要點を攻略した。而してミドウエー方面では米空母エンタープライス型（一萬九千九百噸）一隻並にホーネット型（二萬噸）一隻を撃沈、敵機百二十機撃墜。ダッチハーバー方面では敵機十四機撃墜、大型輸送船一隻撃沈、重油槽群二ヶ所、大格納庫一棟を爆破炎上せしめた。六月十五日大本營にては「曩に發表せるミッドウエー强襲における戰果中に米甲巡サンフランシスコ型一隻及び米潜水艦一隻撃沈を追加す、右强襲において撃墜せる飛行機は約百五十機なること判明せり」と發表●大東亞戰爭開始以來六ケ月間（五月廿一日迄）に收めたる帝國陸軍の綜合戰果は占領地、本土の三・七倍强、俘虜廿四萬二千、米英關廿五個師餘撃滅、鹵獲火砲三千七百門、敵機撃破千六百三十六機、皇軍新治下の住民九千三百六十八萬と大本營發表（詳細は本文參照）●オランダの壓制に抗して活潑な民族運動をつゞけてきたメダンのインドネシア諸政治團體が發展的解消をとげ、皇軍の指導下に新しく警防團、防諜團を組織し大東亞建設に邁進することゝなつた、解散した諸團體は「インドネシア・キリスト政治團體」「インドネシア國民指導團體」「インドネシア國民團體」「インドネシア回教徒團體」「インドネシア政治團體」などである。●泰國政府はさきに首都バンコックより東北約百廿キロ、メナム河の支流パサク河に沿ふサラブリに移轉するに決し着々新首都建設計畫を進めてゐたが、このほどその大綱の決定を見るに至り、六月二十四日のタイ國革命記念日を期して盛大な新首都建設定礎式を擧行することとなつた、しかして新首都の面積は約二百平方キロ、建設費は一億ないし一億五千萬バーツで、完成までに十ケ年ないし十五ケ年を要する見込であると泰國政府發表。

六月八日

●長くも大元帥陛下におかせられては大東亞戰爭開戰以來陸に海に擧げた皇軍の輝々たる戰果を深く御滿足に思召され屢々勅語を賜り武勲を御嘉尚あらせられ、また前線から歸還の將軍にはその都度拜謁仰附けられ御慰勞の品々を賜はるなど皇軍將兵の上に垂れさせ給ふ大御心のほど畏き極みであるが、尙この度は前線勇士の武勲を親しく偲ばせられる畏き思召から大東亞戰爭において陸軍の鹵獲した各種兵器を叡覽あらせられた。陸下には午後二時半御乘馬運動の御途次宮城內生馬寮廣場に御立寄り遊ばされ陸軍が特に御許許されて同廣場に陳列した戰車、野山砲、對戰車砲その他各種兵器約七十點を叡覽遊ばされたが、大東亞戰開戰以來親しく鹵獲品を覽はすのは御はじめてのことであり畏き叡慮のほどに全國民一同感激申上げた。●西南太平洋方面反樞軸聯合軍總司令部は日本潜水艦が七日夜、暗夜を利してシドニー及びニューキャッスル兩市を砲撃した旨發表し、攻撃はシドニーに引續いてニューキャッスルに行はれたもので、シドニーでは市內數ケ所より火災が起り、建築物に損害があつたと認め、ニューキャッスルでは港灣施設が直撃されたと外電報ず。ニューキャッスルはシドニーの北百八十二キロ、ハンター河の河口にあり、人口約二萬、濠洲最大の炭田を有し、羊毛の輸出も盛んである。●マダガスカルとアフリカ間のモザンビク海峽で日本潜水艦が英船三隻を撃沈した旨外電報ず。●內閣および各省委員の翼賛政治會入りの人選は七日の當任總務會の決定案を、八日朝歸京せる阿部總裁の手許におくりその統裁を經て政府に傳達したが、翼賛政治會では本日正午より總務會を同午後二時よりさらに定例總務會を開いて同會の顧問、評議員、政務調査會長、會計監督、事務局部長の規程と人選を決定した。●汪國府首席の滿洲國特派大使は章外交部大臣以下の隨員を從へ、午後零時二分大連より空路南京飛行場に到着、日華官民多數の出迎へを受け宿舍迎賓館に入つた。●海洋關係の諸團體を連絡統制し海洋思想の普及徹底を强化するために「大日本海洋聯盟」が寺島遞相を會長に誕生、午前十一時から大東亞會館に結成式を擧行した。●敗敵三萬を追ひ込んで崇仁縣城を包圍したわが中支軍部隊は午後一時十分崇仁に果敢な突入を決行、ついで崇仁を完全に占領。また撫州方面から進出の有力部隊は長驅崇仁背後の要害宜黃を押へる奇策に出で敵九十八軍を痛撃し午後五時崇仁縣城を占領した。●インド北邊に突如數萬の反英分子が蜂起し、英駐屯軍の補給部隊を攻撃したといはれる、またイランのアラスプラン地方でクルド族が各村落を襲撃し英當局はこれを鎭壓すべく直に軍隊を派遣したと外電報ず。

大東亞戰爭記錄畫報（終）

大楠公精神と大東亞戰爭

島屋政一

大東亞戰爭記錄畫報の校正まさに終らんとする時に當り、即ち六月廿八日關西大學校友會の主催により大楠公と最も關係深き南河內の觀心寺恩賜講堂に於て講演會を開催せられ、小生これに招聘せられ標題に就き講演を致しました、本篇はその要旨でありますが、本書との關係また淺からざるを思ひ附錄として卷末に收錄した次第であります。

眞の日本精神

明治維新の覇業が完成されましたのも、日清日露の兩役に大勝を博しましたのも、而して今日の大東亞戰爭に於て、皇軍は赫々たる武勳を輝かし世界史上未曾有の大戰果を收めつゝある以所も、畢竟大楠公精神の發露であると思ふのであります、大楠公精神は、これがほんとうの大和魂であり日本精神であります。

米英に對して、日本は讓歩し得られる限度に讓歩を致し、事を平和裡に收めんと、充分手を盡くし、種々努力を拂つて來たのでありますが、日本が平和裡に事を解決せんと努力すればする程米英は益々附け上り、傲岸暴戾の態度を以て我に臨み、所謂ABCD包圍陣を强化し、飽くまでわが國を苦境に陷らしめんと企てたのであります。然るに昨年十二月八日米英に對し宣戰の大詔が渙發せられ、大東亞戰爭勃發するや、帝國海軍は特殊潜航艇と空軍を以てハワイの眞珠港に據る米太平洋艦隊を忽ちにして全滅せしめ、相次いでシンガポール港に據る英東洋艦隊の主力はマレー沖に於てわが海鷲の爲めに潰滅されてしまいました。

大東亞戰爭開始以來、日本軍は連戰連勝であるに引代へて米英軍は連戰連敗であります、この結果が事態を逆轉せしめたのであります、日本軍は非常に强い不思議な力を持つてゐる、つい此間米國の陸海軍兩省では共同の形式で、米兵は强力な日本軍を反撃する力がないと聲明を發したほどでありまして、世界各國は日本軍の底知れぬ力の强さに驚嘆してゐます、なぜ斯くも日本軍は强いかと申しますと、日本人には大楠公精神が宿つてゐるからであります、この世界無比の大楠公精神が不思議な力を發揮し、僅か半歲にして、斯くまで世界の情勢を變動せしめたのであります。

大楠公精神と申すものを要約しますと、天皇陛下の爲めには自分といふもの或は一家一族を犧牲にして忠節を盡くすといふ所の大精神であります

大東亞戰爭開始以來、日本軍は連戰連勝であるに引代へて米英軍は連戰連敗であります、この結果が事態を逆轉せしめたのであります、日本軍は非常に强い不思議な力を持つてゐる、つい此間米國の陸海軍兩省では共同の形式で、米兵は强力な日本軍を反撃する力がないと聲明を發したほどでありまして、世界各國は日本軍の底知れぬ力の强さに驚嘆してゐます、なぜ斯くも日本軍は强いかと申しますと、日本人には大楠公精神が宿つてゐるからであります、この世界無比の大楠公精神が不思議な力を發揮し、僅か半歲にして、斯くまで世界の情勢を變動せしめたのであります。

大楠公精神と申すものを要約しますと、天皇陛下の爲めには自分といふもの或は一家一族を犧牲にして忠節を盡くすといふ所の大精神であります

大東亞戰爭の劈頭に於て米太平洋艦隊に殲滅的大打擊を與へた九軍神や、肉彈となつてマレー沖に英の主力艦プリンス・オブ・ウエルス及びレパルスを擊沈したわが海の荒鷲の偉勳を初め、その他皇軍將士が到る處敵なき概を示し、眞に不思議と思はれるほどの働きをなし、功績を著はしてゐますのは、わが軍人の心底に大楠公精神が漲つて居るからであります。

大楠公精神の普及

幕府時代にありましては、眞の日本精神を解するものが少く、武士の間に私利私慾を擅にする傾向がありましたが、北畠親房の『神皇正統記』や水戸光圀の『大日本史』などで段々日本國體の如何なるものであるかが闡明され、更に賴山陽の『日本外史』が出て、これらが原動力となり、明治維新の大業を完成するを得ました、明治時代に入りまして、大楠公精神が益々國民全般の腦裡に植付けられ、それが日清日露の兩國難に直面しまして愈熾烈となり、現在におきましては一億一心、眞の日本精神であるところの大楠公精神が國民全般に徹底するに至りましたことは、洵に御同慶の至りに存ずるのであります。

然かし、いくら大楠公精神の如何なるものであるかを心得てゐましてもそれ相當の働きをなし、これを實行に移さねば、その價値はないのであります、楠木正成公が笠置にお召出されになりましたのは、公が三十九歳の時であります、公はそれまでは地方の行政に多忙な方でありましたが、常に武を練ることを忘れず、また兵學軍學から一般の學問をも勵みました。戰術の至妙を盡くされ、文武兼備の名將と謳はれました公は三十九歳まで絕へず物事を準備し、訓練を怠らなかつたのであります。正成公は三十九歳から湊川で討死される四十三歳まで五年間、實に立派な戰爭を致して居ます、日本で著名な英雄豪傑でも初めの內は戰爭は至つて下手でありまして、段々上手になつて來てゐますが、公は緒戰から立派な戰爭をしてゐられます。私は陸軍の委囑で數年間軍事講演に從事しましたが、當時陸軍の戰術研究家諸氏から承りますところによりますと、正成公の策戰は山岳要塞戰にしましても、平地遭遇戰にしましても、敵前渡河戰にしましても、また市街戰にしましても眞に巧妙を極めたものでありまして、少しの無駄もなく、今日の作戰の模範となつてゐるとのことであります。故に笠置の行宮にお召出されになり、直に馳せ參じました公は即座にあのやうに立派に奉答することが出來、叡慮を安んじ奉ることが出來たのであります。若し公に著述がありましたならば、孫子の兵法やモルトケの戰術書以上に世界に冠絕する兵法軍略の書が遺つたであらうと思ふのであります。

大東亞戰爭に於て皇軍が破竹の勢を以て進擊し、向ふところ敵なく、敵軍をしてたゞ呆然たらしめてゐますのは、楠大公の精神に則り、平素に於て準備を怠らず、猛訓練を忘れなかつたればこそ、緒戰に於てあのやうな大きな働きをなし、今日の赫々たる大戰果を擧げ得たのであります。

建武中興

正成公が笠置から河內に還り、赤阪城や千早城に據りまして、思ふ存分敵の大軍を惱ました奇策善謀は、一朝一夕の思ひ着きではなく、平素研究された軍學の賜であります、全國見渡す限り賊軍であり、孤立無援の正成公でありましたが、一身を捨て一族郎黨を犧牲にして、陛下の御爲めに忠節を盡くすといふ大精神の下に孤立無援は公にとつては問題でなかつたのであります。北條方八十萬の大軍を一手に引受けて動ぜなかつた公の膽略到る處で敵の大軍を擊破しました智謀勇戰は、克く寡を以て衆を制し得たのであります、この時に當り風を望んで漸次官軍に屬するものが現はれ、遂に鎌倉幕府は倒壞し、茲に建武中興の偉業は成つたのであります。

建武中興成り、論功行賞に當りまして、有象無象が全國到る處に現はれました、自分はこれ程の功勞があるから、それ相當の恩賞に與りたいと云

ふ嘆願書が何千通とも知れぬ程京師に提出されました、昨日まで賊軍に從つてゐたもの迄が、俄かに勤皇家に早變りしたものも澤山居るといふ有樣で、實に困つた世の中でありました。

足利尊氏は鎌倉から京都へ援軍に立つた者でありますが、北條家の形勢の非なるを洞察し、二心を抱きつゝ大軍を引率して京師へ上つたのであります、そして近江の鏡ヶ宿に着いてから天皇方に歸順を申出で、後醍醐天皇のお許しを得たのであります、故に堂々と勤皇の旗を翻して京都に入るべきでありますが、尊氏と共に京都へ向つた鎌倉の大將名越高家には此事を祕し、尊氏は仲よく高家と共に京都へ入りました、ところが高家が官軍に討たれたので、尊氏は此時なりと、北條家を見限り丹波の篠村八幡宮に據り、初めて勤皇の旗揚げをしたのであります。

當時鎌倉幕府の京都探題である六波羅の賊軍を攻めてゐたのは赤松圓心の軍であります、高家が圓心の兵に殺されたので、尊氏は歸順の道を實行したのでありますが、若し高家が討たれず、逆に勤皇方の圓心が討たれ、官軍の形勢が非でありましたならば、尊氏は歸順しなかつたであらうと思ふのであります。

京都の六波羅が陷ると、尊氏は何人の許しも受けず、勝手にこゝに入り勤皇家の總元締でもあるかの如く振れ舞ひ、京都へ這入つて來る諸國の武士を手許で養ひ、自分勝手に勢力を張り初めました、北條の鎌倉幕府が滅んだから、足利の京都幕府を開かんとする下心であります。

足利尊氏謀叛

尊氏の野心の露骨さは誰れの目にも同じやうに窺はれました、これでは折角鎌倉幕府を倒しても、その甲斐がありません、又元の武家政治に逆戻りであります、護良親王を初め奉り、勤皇家がこれを默視する筈がありません。

建武の中興成るに於て、尊氏は破格の恩賞に浴し、陛下の優遇を蒙りましたが、素々我慾一點張りの尊氏でありますから、自分の思ふやうにならぬに心穩かならぬものがあります、中興成つて間もなく、即ち建武二年八月、尊氏は私利私慾の爲め大政翼贊に背き叛旗を擧げたのであります、同年十二月から翌延元元年の正月にかけて、足利軍は楠木正成公や新田義貞公や、北畠顯家卿の兵と京都で戰つて大敗し、尊氏は京都の西山から丹波路に出で、兵庫に遁れ九州へ落ち行くことゝなりましたが、尊氏を九州へ逃げさし、再擧を計らしめた主謀者は赤松圓心であります。

赤松圓心は正成公が孤立無援のまゝ北條軍と戰つてゐる時、窃かに形勢を傍觀してゐましたが、その後漸次諸方に勤皇家が起り、官軍が有利なのを認めて、之に參加した者であります、然るに論功行賞に於て優渥なる勅語及び錦直垂を賜ひ、次いで播磨國守護職に任ぜられましたが、或る疑ひの爲め守護職を解かれましたので、不平滿々でありました、そこで尊氏を盛り立てゝ、尊氏に重用されんことを念願し、尊氏の參謀となつて九州で再擧を計らしめたのであります。

正成公の如きは恩賞などは眼中にありません、一身一家を犧牲にし、武士として御國の爲めに働いてゐるのでありますから、尊氏や圓心とは、其の精神に於て雲泥の差があります、若し恩賞を當てにして戰場に臨むとすれば、第一に命が惜しいから九軍神や肉彈勇士など現はれやう筈がありません、眞に一億一心死生を超越した忠節があつてこそ始めて戰場で大勝を博することも出來、國家が安泰なのであります。

湊川の決戰

尊氏は九州で二十萬の大軍を纏め、四月三日筑前を發し、途中で中國や四國の兵を加へ、五月十日足利直義をして陸軍を率ゐ、少貳賴尙を先鋒として備後の鞆之津より上陸して中國を徇へしめ、尊氏自ら水軍を督して京

師に向つて上つて來たのであります、京都では之に對して御前會議が開かれました、正成公は御下問に對し奉つて、陛下には暫く叡山へ行幸を仰ぎ新田義貞公守護し奉り、尊氏を京師に誘ひ、臣は攝河泉の兵を以て先づ敵の糧道を絶ち義貞公と共に尊氏の軍を挾擊して、一擧に之を殲滅するは難くない旨を奉答したのでありますが、坊門藤原清忠は之に反對し、遂に正成公の献策用ひられず、公をして湊川に出陣せしむることに廟議は一決したのであります、廟議が決定された以上、之に反對したり反感を抱いたりする正成公ではありません、湊川にて血戰十六合、身に十數創を蒙り、遂に壯烈な最期を遂げましたのは延元元年五月廿五日であります、死に臨み公は弟の正季と七生報國を誓はれましたが、その言葉に花が咲き、實を結んで、今日の隆々たる帝國を築き上げたのであります。

正成公の献策致しました尊氏挾擊のことは、公に充分自信のあつたことゝ思はれます、公は金剛山下の山また山の間に人となり、それに平素の猛訓練により、平地戰や山岳戰に長じてゐましたことは北條軍との合戰や京都で足利軍を大敗せしめたことなどでよく之を證明してゐます、奇策智謀を以て敵軍を破るのは、公の獨特の戰術であります、それに新田義貞も陸地戰に長じてゐます、義貞は上野に住し、その兵も多く山國の產でありました、尊氏は水軍にも長じた大軍を以て、水陸並び來るのであります、當時官軍には有力な水軍は無かつたのであります、故に尊氏の兵を京都へ入れさせ、陸軍のみにして、これを南北から挾擊せんとしたのが正成公の策略でありました。尊氏が丹波から兵庫へ逃れました延元元年二月に、尊氏の爲め兵庫に馳せ參じたのは四國の細川頼之の軍と防長二州の軍勢でありました、尊氏はこれにより勢力を盛り返へすべく京都に攻め上らんとした時、大楠公は初め西宮の海岸附近で戰ひましたが、徐々に退却しまして攝津の豊島原まで敵を誘ひました、敵軍は官軍敗退と見て、陸地深く追擊した時、大楠公は俄かに猛反擊を浴せて大に足利勢を破り、尊氏をして入江を斷念せしめたのであります、大楠公は力めて水軍を避け、飽まで陸地戰を以て敵も擊破する策を採つたのでありますが、惜しいかな兵法を知らない公卿清忠の反對に遭ひ、之を實現し得なかつたのであります。

愈々湊川で尊氏の軍と決戰の覺悟を決めました正成公は、櫻井驛に子の正行公を呼び寄せまして、將來を戒めあの立派な遺言を致し、湊川で苦戰力闘の末弟正季公と刺違へて自害されました、一族十六人その他從兵悉くこれに殉じたのであります。

大楠公の風格

戰爭をするにしても、又その他いろ〳〵の事に携はるに致しましても第一に忠誠といふことを先づ念頭に入れ、これを基として遂行せねば物事は成就致しません、戰ひがいくら上手でも忠誠の魂がなくては米英軍の如く連戰連敗に終ります、我慾主義で事業を經營したのでは、或は一時的繁榮を招くこともありませうが、永續せず結局沒落の運命を辿ることゝなります、今日の日本軍人は皆日本精神の權化であり、大楠公を模範として戰つてゐますから、世界を驚倒せしめる大戰果を收めてゐるのであります。

大楠公は啻に戰術に長じてゐましたのみでなく、行政にも長じ、且つ人情に篤く博愛主義の英雄でありました、南河内方面の山間を開墾して農民の生活を容易ならしめたり、不便な所へ道路を造つたり、住民に種々の副業を與へまして、寒村を裕福に導ひたり、いろ〳〵の事業を企てゝ居りました、耕地整理や植林事業にも大に心を盡くし、又有閑地に桑や棉を栽培して、養蠶業や綿布事業を奬勵しました、河内木綿で名を得た河内の織布事業は公の創意であります、又千早の產物として有名な凍豆腐の如きも公が態々高野山に人を遣はし、高野豆腐の製法を習得せしめてあの寒村を富裕ならしめたのであります。

正成公が部下を犒ふことはまた格別でありまして、建武中興に際しまして

ては多額の私財を部下に頒ち與へたり、又味方や敵の區別なく戰死者を鄭重に弔ひ、慰靈祭も行ひました、その塚は今に赤阪に存してゐます。建武中興の論功行賞に際しまして、公は九州で戰死された菊池武時に對して、厚く恩賞の及ばんことを嘆願致した如きは、公の人格が窺はれます。

公は度量最も廣大でありまして、且つ實踐窮行の士であります、後醍醐天皇が笠置に公をお召出しになりました時の公の奉答は如何にも雄大で、自信に富み眞心を罩めたものでありました、賊軍を撲滅せざれば止まぬ烈々たる氣魄を以て奉答したものであります、陛下も定めし御滿足あらせられたことゝ拜察致します、而して公はこの氣魄を實行に移して偉功を樹てられたのであります。

正成公は兵庫へ決戰に赴く途中正行公や家人を櫻井驛に呼び寄せまして、靜かに今後の處置萬端を言ひ遺しまして勇ましく出陣されました、危機に臨んで少しも亂れたところなどなく實に立派な態度であります。愈々明日が足利勢と雌雄を決するといふ五月廿四日の晩に兵庫で新田義貞と相會し、失意の義貞を慰め、共に杯を擧げて、明日は尊氏の大軍を擊破するのだと、勢ひよく語られたことなどを思ひますと、自分の戰死は覺悟の上でありましたが、その死を少しも苦にせざる意氣や、自分の兵數の極めて少いこと、尊氏の大軍を怖れないこと等がよく判り、公の悠揚迫らざる態度に深く敬服するものであります、この氣魄があつてこそ戰爭に勝てるのであります。

正成公は自分の戰略が用ひられず、事志と違ひ湊川の露と消えまして、建武中興は不幸にして失敗に歸しましたが、公は護國の神と化し、非理法權天の壯烈果敢なる大楠公魂は、先づ江戸時代に徐々に復活し、國民の胸中に甦り、その純眞なる精神は年と共に益々發揮せられまして、明治維新の大業が成就せられ、また世界古今未曾有の今日の勝ち戰となつてゐるのであります。

正行公初め一族の忠節

正行公は婦道の龜鑑と仰がるゝ母君に養育せられ、能く父君の意を體して忠節を盡くし、廿四歳を一期として四條畷に南朝の花と散りました、正行公は戰ひの非なるを見て、賊の獲るところとなる勿れと、弟正時と共に刺し違へて國に殉じたのであります、時に正平三年正月五日であります、實に忠孝兩道を全ふした絶世の偉人であります。茲に於て菊水の族再び醒らず、世はまた暗黑時代となりましたが、七生報國の精神、即ち大和魂の骨髓であるところの大楠公精神は、正行公によりて立派に繼承せられ、更にその精神は漸次全國に普及せられまして、今日の立派な國體となりました。

この日本精神を皷吹し、全國民をして嚮ふところを知らしめ、國民を奮起せしめる爲め、楠公の後裔また種々の艱難辛苦を致して居ます。正行公の弟正儀の長子楠木正勝は攝津住吉天王寺の戰に左膝を傷けて跛者となり再び戰場に臨むこと能はざるに至り、泉州大雄寺に入りて僧となり、能勝と稱しました、後ちの有名な傑堂能勝禪師であります。

能勝禪師は私かに後醍醐天皇の御宸筆を奉じて北陸地方を巡り、後ち越後國岩船郡門前谷村に靈樹山耕雲寺を建立し、それより奥羽地方をも巡りまして、出羽の八乘山即ち現在の金峰山麓に金澤山洞春院を開き、同山に正成公の遺髮を埋めて叮重に弔ひました、又後醍醐天皇の御震筆は初め洞春院に納めましたが、その後寺に藏せん事畏れ多きにより、金峰山金剛藏王權現に奉納致して今に傳はつてゐます。

能勝禪師は北陸奥羽に亘りて、德望一世に高く、終に禪宗の總持に上りました程の大德でありましたが、諸國行脚の意志は勤皇の念願を成就せしめんが爲め、諸國の情勢を觀望し、人心を集握するための雲水行脚であつたやうに思はれます。それは足利幕府が絶へず禪師の行動を注視してゐた

ことによつて證明されます、禪師の事に就きましては世間に餘り知られてゐないのは慨はしいことゝ思ひます。

正勝の子正秀即ち正成公の祖孫より正盛、盛信、盛定となり、その後ちは今に續いてゐますが、何れも佛門に入り正秀は山陽山陰を行脚し、遂に因幡の勤皇家と結託する爲めに鳥取に留まりました、そして機會あらば勤皇の旗を擧げんと大に畫策したのでありますが、幕府の嚴重なる警戒で終に志を得る機會が無かつたのであります。

楠木五郎光正と申す人、この人の系圖は未だ確かと判りませんが、京都附近に住し、足利將軍義教を殺害せんと圖り、密かにその機會を窺つてゐましたが、永享元年九月十八日、將軍が奈良の春日神社へ參詣されました際、之を刺さんとして捕はれ、京都へ連れ戻されまして同月廿四日六條河原で斬られました、正成公が湊川で戰死されましてより九十三年目であります、京師の人々は光正の意氣を壯とし、その臨終に會はんとて六條河原に押し寄せました、幕府ではこれらの人達を警戒するため七百名からの護衛兵を出したのを見ましても當時の狀況が想像されます。光正は死に臨みまして天下國家を論じ、世を罵つた末莞爾として首を刎ねられたのであります、光正はその時僧侶の風をしてゐたとのことでありますが、武士の風をするよりも、僧侶とか山伏に變裝してゐる方が祕密が守られたからでありませう。また東國の常陸では楠木正家が勤皇の爲め非常に活躍しましたことは史上に明らかであります。

斯く大楠公の後裔が遠く各方面に足跡を延ばし、日本精神の皷舞に努めてゐますことは、大楠公の七生報國の誓願に呼應するものでありまして、これら勇士の努力と艱難辛苦の結晶が、今日の大日本帝國を造り上げるに大に與つて力あるものであります。

結論

日清、日露の兩役は、その當時にありましては、我國にとりまして相當の大戰爭でありましたが、今日の大東亞戰爭と比較しますと、その規模は餘程小さいものでありました、日清、日露兩役でも大勝を博しましたが、日清役では戰後直ちに三國干涉に遭ひ、涙を呑んで日本は隱忍自重の已むなきに至り、日露役でも最後の媾和談判で國民の憤慨が勃發したほどであります、然るに今日では米英を向ふに廻はして少しも怖れない、唯正義に向つて邁進あるのみと、一億國民相協力して十二分の活動をなし得られるのも、國民全體が大楠公精神を基礎として忠節を誓ふ結果に外ならぬと思ふのであります。

諸君は本日大楠公と最も關係深き觀心寺にお詣り致し、また境内に眠られてゐます大楠公の首塚に參拜し更に六百餘年を偲ぶ種々の御遺物や、大楠公のお住ひになられた學問所を拜觀し、また公が兵庫の戰ひに赴くため建築を中止せられました建掛塔などを御覽になられて、定めし感慨深きものがあつたことゝ存じます。

私は本日この恩賜講堂に於て諸賢と共に會し得たことを非常に光榮とし同時に六百餘年前を回顧致しまして、各位と共々に大楠公に拜顏の榮を得たやうな氣持が起りまして、自ら襟を正すものであります。茲に謹みて大楠公及びその御一族の御冥福を祈り、併せて隆々たる帝國の前途を祝福致して私の講演を終ります、長く御清聽を煩はしましたことを深く感謝致します。（完）

支那事變回顧

昭和十二年七月北支事變勃發し、九月に入り戰爭は上海に擴大して支那事變となり、昭和十六年十二月八日大東亞戰爭となる、本欄にては北支事變より大東亞戰爭に至るまでの主なる出來事を示し、本書通覽の便に供せしものである。

昭和十二年

▲七月七日　天津郊外蘆溝橋事件勃發、これ北支事變の端緒なり
▲八月八日　皇軍堂々北京入城
▲八月廿五日　帝國海軍第三艦隊揚子江—汕頭沿岸封鎖宣言
▲九月二日　北支事變を支那事變と改稱す
▲九月廿七日　濟南占領
▲十月十七日　包頭占領
▲十月廿四日　大場鎭及び廟行鎭を占領す
▲十一月五日　杭州灣に敵前上陸
▲十一月六日　日獨伊三國防共協定調印
▲十一月十六日　蔣政權南京より重慶に首都移轉
▲十一月二十日　大本營を設置
▲十二月十二日　南京攻略成る
▲十二月十四日　北京に中華民國臨時政府成る

昭和十三年

▲一月十日　海軍部隊青島を占領
▲一月十六日　「蔣政權を相手とせず」との近衞聲明を發す
▲三月廿八日　中華維新政府南京に成立
▲五月十九日　中支の要衝徐州完全攻略
▲七月十二日　張鼓峰事件發生
▲八月十日　日ソ停戰協定成る
▲十月十二日　皇軍バイヤス灣に敵前上陸
▲十月廿一日　皇軍廣東に入城
▲十月廿七日　漢口、漢陽、武昌即ち武漢三鎭完全攻略成る
▲十二月十八日　汪精衞氏重慶を脫出す

昭和十四年

▲五月卅一日　厦門に敵前上陸
▲六月十四日　天津英佛租界の隔絶斷行
▲六月廿一日　皇軍汕頭敵前上陸
▲七月十日　汪精衞氏蔣介石との絶緣聲明を發す
▲七月十五日　日英會談開備さる
▲七月廿六日　米、突如日本通商航海條約廢棄を我國に通告す
▲八月卅一日　英獨交涉決裂
▲九月十六日　ノモンハン事件の停戰協定成立發表

昭和十五年

▲三月十二日　汪精衞氏新中央政府樹立を宣言す
▲三月三十日　國民政府南京に還都し新國民政府成立す
▲六月十二日　日、タイ和親友好條約調印
▲九月廿三日　皇軍佛印へ進駐
▲九月廿七日　日獨伊同盟調印

昭和十六年

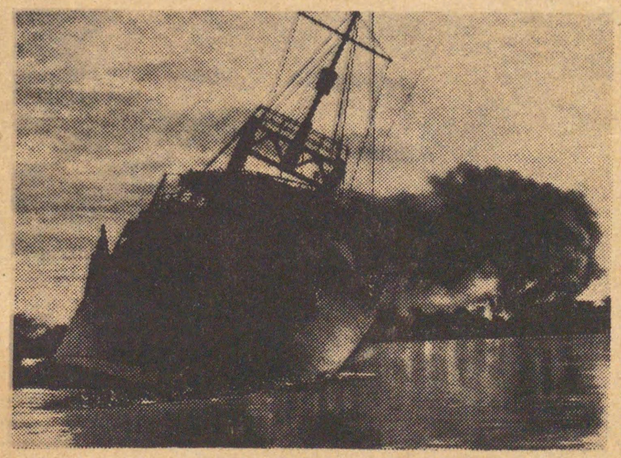
▲四月十三日　日ソ中立條約モスコーにて調印
▲六月十六日　國民政府首席汪精衞氏來朝す
▲七月八日　蘭印使節芳澤全權一行日昌丸で神戸に歸着
▲九月廿七日　皇軍長沙占領
▲十月十五日　滿蒙國境確定文書調印完了
▲十二月一日　日米交涉重大局面に到着と東郷外相議會で報告
▲十二月三日　ハル米國務長官基本原則論を頑守し我政策を非難
▲十二月五日　野村、來栖兩大使ハル長官と會談し米大統領照會に對し我回答を手交
▲十二月八日　米英兩國に對し宣戰の大詔渙發、同十二日支那事變を含めて大東亞戰爭と呼稱

大東亞戰爭記錄畫報前篇
昭和十六年六月十五日印刷
昭和十六年六月二十日發行
定價　金壹圓八拾錢
含特別行爲稅
大阪市南區上本町二丁目廿三番地
英文大阪毎日學術號編輯局
編輯兼發行人　代表者　島屋政一
大阪市南區上本町二丁目六番地
發行所　大阪出版社
電話長堀（九六七五）番
振替大阪（三〇七六）番
出文協承認　ア四七〇六〇七號
會員番號　一〇五〇二二番
東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元　日本出版配給株式會社
西大島大阪營業所　谷口印刷所印刷

英文大阪毎日學習號編輯局編

毎日新語辞典

本書にはオーソリチー、基本産業、サスペンス、公益優先、リンク制、ロードショウ、紙の彈丸、コンツウエルン、ラビリンス、資金凍結、フンク聲明、ヘゲモニー、科學する心、ユートピア、海洋發電、オンパレード、國土計畫、インフレスケール、廣義國防、コンクール、全體主義、民主主義、スポークスマン、コンミュニケ、七つの海、イデオロギー、三民主義、リンク、テロリスト高大教、カード階級、Uボート、デザント隊、ジオニズム、物動計畫、集團保障、アーケード、サボタージュ、廣域經濟、五馬聯盟、新民主義、ヴアラエチイオブザーヴアー、銀幕越境、求償協定、圓ブロツク、德政、高踏的ステートメント、第五列、第六部隊、多角的經營、人的統制、アヂプロ、インタービュー、職能代表、鎭靜政策、アンクルサム、帷幄上奏規格統一、機甲本部、空中魚雷、九・一八價格、クレヂツト、興亞政治、コントロール、經濟ブロツク中央集團・國民徵用、ドクトリンミュンヘン協定、ラテンアメリカショツク、パツション、ミリオンコント等現代流行の新語三千餘に懇切明快な解說を附し、又本辭典の特徵として外來語は皆その語源を示したれば英語の單語を學ぶ上にも眞に好個の參考書である。



艦敵す晒を骸殘に外港ラニマ

B列7號判四百頁
縱四寸二分橫三寸
洋裝本綴堅牢函入
定價一圓五十錢
送料十二錢

發行所 大阪市南區上本町二丁目 大阪出版社 電話南(76)番五七六九/番六七六九 振替大阪三〇五〇六番